

# 田和山遺跡



右から山頂部、第1、2、3環壕（南より）

2001年3月

島根県松江市教育委員会



対象地域の位置を示す地図



周辺の主な遺跡

## 1. 位置と歴史的環境

田和山遺跡は、松江市の中心部から南へ約3キロの郊外にある。松江市の最南部にある忌部地区から北西方向に広がる宍道湖へ流下する忌部川の中流域に展開する乃木平野の東部に独立してある「田和山」と呼ばれる丘陵の北半部に所在する。所在地籍は、松江市乃白町、乃木福富町、浜乃木町の3町にまたがり、面積は約1.6ヘクタール余りを測る。

遺跡は、最高所の標高約46mの小高い丘を中心に山麓斜面まで展開し、山頂からは東に茶臼山（出雲国風土記載の神名堅野）や大山（出雲国風土記載の火神岳）を、北に松江市街地と島根半島を、北西方向に宍道湖（出雲国風土記載の入海）を眺望することができる。

現在、遺跡の北側には山陰自動車道が通り、この道路の北側水田一帯は、「松江浜乃木・乃木福富地区画整理事業」が実施中である。東側には、元南北に長い水田地があったが、平成9年度に松江市が市立病院造成予定地として取得した。その東方丘陵一帯は、昭和54～61年度にかけて実施された「松江園都市計画乃木地区画整理事業」によって住宅街などに変貌している。西側は水田が開けている。

田和山の南半部は、平成7年5月に「松江市自然学習の森」として古墳などを巡る散策路や広場が整備された。

遺跡周辺の低地や山麓には弥生時代以降の墳墓や住居跡が発見されており、農耕集落が成立・展開していったことがわかっている。

### 周辺の関連遺跡一覧

- ①友田遺跡……………前期後半からの土器、中期の埴丘墓6基と上埴草26基、埴丘墓群と上埴草群は住みわけをしているが、上埴草群の直上には後に四隅突出になるだらうと思われる貼石方形窓が築造される。（昭和56～57年調査）
- ②二ツ绳手遺跡……………前中期後半、後期の土器（平成11年度調査）
- ③久田遺跡……………前中期後半～後期の土器、石包丁1、石斧1、砾石1、上鍬1、石器未製品5
- ④門山遺跡……………中期～後期の土器、人工水路、分祠形土製品2、上玉2、石鐵2、石匙1、スクレーバー1、麻製石斧8、打製石斧1、石包丁1、大型石包丁2、石鍬1、砾石2、椭石1、磨石12（平成11年度調査）
- ⑤福富I遺跡……………前期、中期～後期の土器、後期の竪穴式住居跡5軒（平成8年調査）
- ⑥寒垣遺跡……………前期、中期の土器、凹石、石鍬、田下乳、木鍬1
- ⑦琴師前遺跡……………弥生土器
- ⑧野口社跡付地推定地……………2段の石積基壇あり
- ⑨山和山1号墳……………古墳時代後期の前方後円墳、全長約20m、横穴式石室あり

## 2. 調査の経緯

平成9年3月、松江市は市域の調和のとれた個性あるまちづくりを目指すこととし、乃木地区では地域中核病院として市民の医療ニーズに応じた診療機能を備える新市立病院を中心として、総合的な保健・福祉施設としての保健福祉総合センターも乃白町田和山地区に建設し、保健・医療・福祉の拠点ゾーンとしてのまちづくりを進めることになった。

田和山地区の造成予定地を分布調査したところ、小規模の古墳12基、埴丘墓1基、住居跡3ヶ所が存在すると予想されたため、平成9年4月から発掘調査に着手した。

平成9年12月、丘陵斜面に弥生時代の三重環壕が巡ることが確認されたので、調査地を拡大し、結果として平成12年4月まで3ヶ年を要し、約1.9ヘクタールを調査し遺跡の全貌を明らかにした。



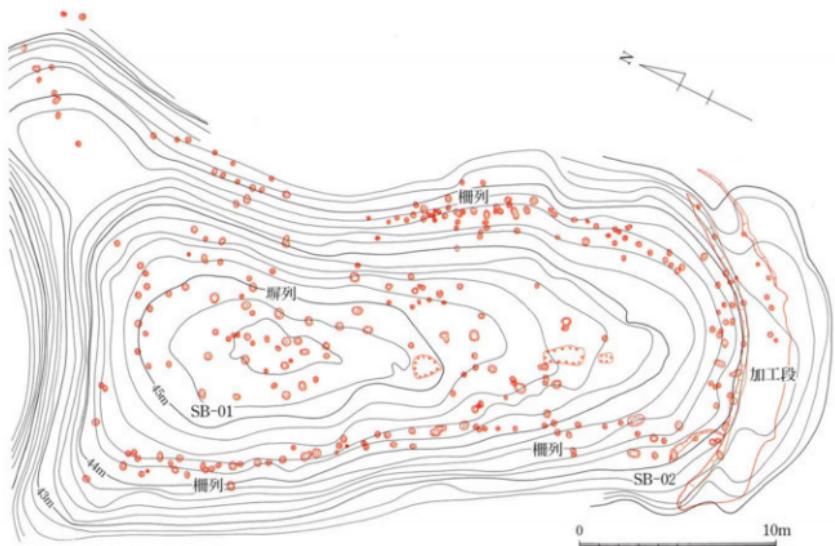
全景、東からみる（1999年10月撮影）



全景、垂直写真



山頂部



山頂部実測平面図

### 3. 遺跡の概要

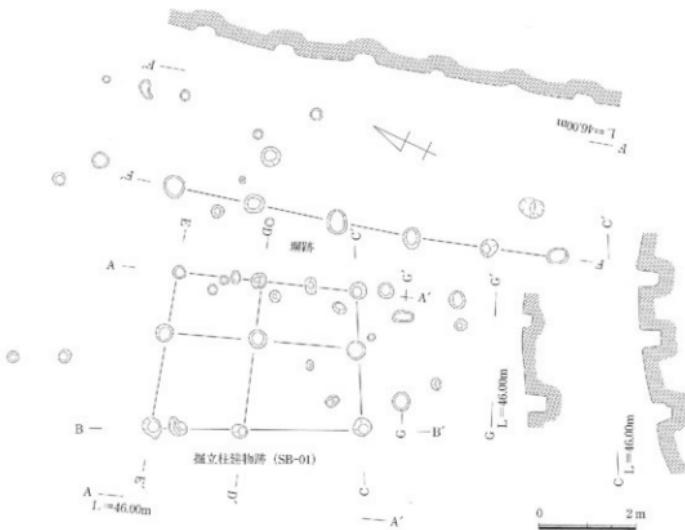
遺跡の構成は、(1)山頂部の建物施設群、(2)斜面の環壕、(3)住居跡群の3つのエリアからなる。以下エリア毎に説明する。

#### (1) 山頂部の建物施設群

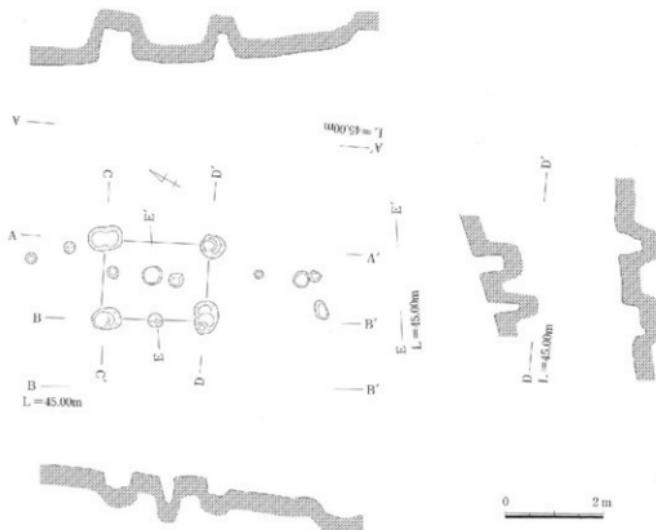
狹隘な山頂部は、東西約10m、南北約30mの緩やかな平坦地で、北側に9本のまとまりのある柱穴群があるが、柱穴の深さが不均一であることや柱心々距離が不等間であることから建て替えの可能性のある高床式倉庫跡1ヶ所（弥生中期後半）、そのすぐ東側に底の浅い6本の柱穴からなる堀跡1列（弥生中期後半）、南西側斜面に一間四方（柱穴5本）の物見やぐら跡と考えられる掘立柱建物跡1軒（弥生前期末～中期後半）、その他性格が不明な多数の柱穴があり、外周に柵列（弥生中期後半）がまわる。柵列は複数回建て替えられている。南部に三日月形の加工段1ヶ所（弥生前期末）、北部に2段の加工段がある。



山頂部の柱穴検出状況



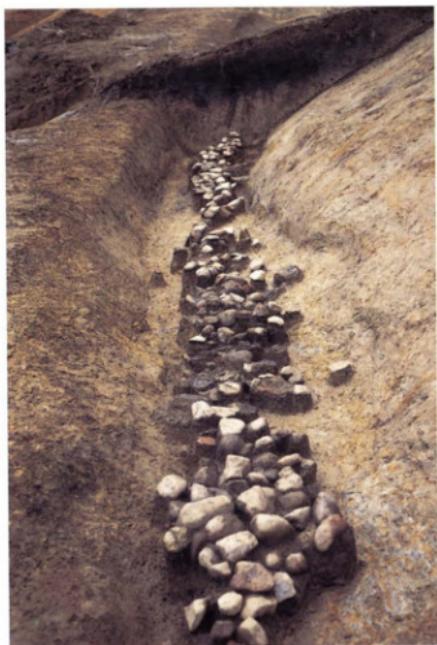
高床式倉庫跡 (SB-01) と堀跡



物見やぐら跡 (SB-02)



第 2 環 壕



第 1 環 壕 と つ ぶ て 石 出 土 状 況

## (2) 斜面の環壕

山頂部直下の斜面には三重の環壕がまわる。内側の第1環壕は、上幅3.5m～5m、深さ約1m、長さ約200m、断面は逆台形を成す。まず前期末頃に谷部のみ3ヶ所に壕が掘られるが、中期後半までに2度ほど掘り直され、支陵部にも掘られて1周する。

真中の第2環壕は、上幅3～7m、深さ約1.5m、長さ約226m、断面は、V字形を成す。中期後半までに掘られ1周する。

外側の第3環壕は、上幅3.5～4m、深さ1.8m、長さ約275m、断面は、V字形を成す。中期後半までに掘られるが、東南部27.5mの区間は、両端の底面が上がっており、当初から造られていなかったものと思われます。

第1環壕と第2環壕の間には、環壕掘削土等を盛り上げた土壘状の高

まりが認められ、その規模は北側では基底幅約11m、残存高約3.2m、西側で基底幅約9m、残存高約1.6mを測る。第2環壕と第3環壕も同様である。

### (3) 住居跡群

住居跡は、環壕の外側斜面にあり、弥生時代中期後半の竪穴式円形住居跡が11軒、同時期の加工段が13ヶ所、ピット群2ヶ所、尾根を削平した段1ヶ所の計27ヶ所があります。北側と西側斜面に偏在しているが、大半は北側斜面に分布している。



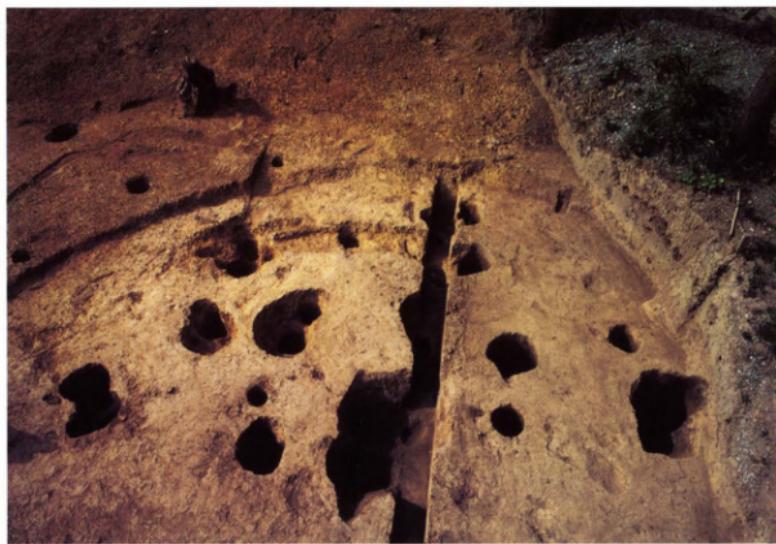
北側斜面の竪穴式円形住居跡



北東斜面の竪穴式円形焼失住居跡



西側斜面の加工段



西側斜面の竪穴式円形住居跡

## 4. 遺物の概要

次に出土遺物について概観してみる。

### (1) 祭祀関係遺物

- ア 銅劍形石劍……第1環壕から出土。残存長10cm。復元長約40cm。斐川町の荒神谷遺跡から出土したような中細形銅劍をまねて作られた良質の黒色頁岩質の石劍の破片。茎と元部にかけての一部だが、全体によく研磨した優品で、石質は滋賀県北部産出の高島石と見る考え方もある。(図1)
- イ 土 玉……主に第1環壕内から14個出土。直径3cm余りのものが多い。弥生時代のものでは、鳥取県氹高郡青谷町の青谷上寺地遺跡の出土例がある。(図10)
- ウ 分銅形土製品……第3環壕と西の谷部から2点出土。片面に櫛状工具で列点文をつける。(図11)

### (2) 武器類

- ア 鉄劍形石劍……環壕や環壕外斜面から6片出土。当時まれであった鉄劍をまねて作られた石劍。鎬のあるものと無いものの2種がある。(図2)
- イ 石 戈……西の谷部から採集。鎬に近い部位の破片で断面は菱形。中期前半頃の武器。



出土遺物・石器類

形祭器との見方もある。

- ウ 環状石斧……第1環壕や環壕外斜面から5片出土。戦闘用指揮棒とも言われる。(図3)
- エ 石 鐵……約180個以上出土。ほとんどが第1環壕内から出土。長さ1~3cm前後のものが大半で、無茎と槍状の2種がある。分析の結果、香川県の金山産サヌカイト製が約6割強、島根県隠岐島の黒曜石製が約4割弱という割合である。住居跡の内外でそれぞれの原石や楔形石器やハンマーストーンも出土。(図4)
- オ つぶて石……約3000個以上出土。石質は、第1環壕造成初期の段階では、田和山丘陵の岩脈の玄武岩だが、以降の段階は、西側の乃木平野を流下する忌部川流域の川原石を用いている。(図13)

### (3) 生活・生産活動関係遺物

- ア 土 器……壺、甕、高环、台形、蓋、ミニチュア土器などでコンテナ約124箱分。前期末から中期後半までのもので、後期の土器は全くない。瀬戸内沿岸西部の影響の強い土器や薄桃色に化粧掛けした土器もある。(図14~20)
- イ 石 斧……第1環壕や環壕外住居跡から29点出土。大型蛤刃石斧22点、柱状片刃石斧2点、扁平片刃石斧5点。(図5)
- ウ 石包丁……14点出土。(図6)
- エ 大型石包丁……6点出土。(図7)
- オ 砥 石……23点出土。

### (4) 特殊な遺物

- ア 石板状石製品……2点出土。内、1点は厚み7mm、残存辺長4.1cm。断面は台形状で石質は流紋岩。(図8)他の1点は厚み6mm、残存辺長2.8cm。片面に直径4.2cm、深さ1mmの円形のすりばち状くぼみがある。(図9)いずれも小片で不明な点が多いが、今のところ朝鮮民主主義人民共和国の王野墓(おおくぼ:平壤市にある樂浪郡時代(BC108~AD313)の石巖里古墳群中の墳墓)出土例や樂浪土城(平壤市の南郊、漢の樂浪郡治址)出土例が参考となるとの意見がある。



8



9

石板状石製品



土 玉



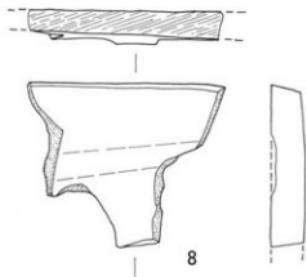
分銅形土製品



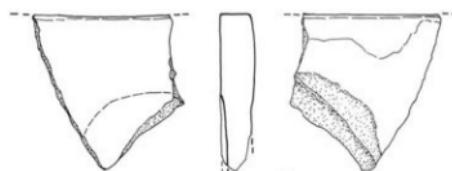
石 戈



つぶて石（底面直径40cm、15個前後）



8



9

石板状石製品実測図（实物大）



15

弥生前期・壺  
残存高さ26cm



14

弥生前期・甕  
高さ20cm

### 弥生前期の土器

- 16 壺形土器
- 17 甕形土器
- 18 高環形土器
- 19 小型脚付壺
- 20 台形土器



### 弥生中期の土器

## 5. 遺跡の検討

### (1) 遺跡の機能していた時代と変遷

まず、弥生時代前期末頃に第1環壕が造成された。同じ頃、山頂部の物見やぐらも建てられた可能性がある。しかし、環壕は一周するわけではなく、東、北、西の谷部しか造られなかった。つまり、下り尾根部には無く、そこから山頂部へは上がれないことはない。当初は聖地と俗界を区別する意味はあったかも知れない。

その後、環壕は崩壊を繰り返したため、2度ほど内側に掘り直された。その段階で尾根部にも掘られ一周した。第1環壕が全周するのと前後して、弥生時代中期の後半頃までに第2と第3環壕も造成され、山頂部の他の建物施設も建てられた。そして、環壕外の北側と西側斜面に竪穴住居11軒と加工段13ヶ所や下り尾根を削平した段（D遺跡）などが作られる。

後期の土器など遺物は、1片すら確認されなかったので、中期の終わり頃には機能を停止し、使われなくなったと考えられる。

### (2) いくさがあったのか？

環壕内から大量の石鎚やつぶて石が出土したことから、この聖地を巡っていくさがあつたのかどうか意見が分かれることもある。いくさがあつたという人は、近隣の「友田遺跡：弥生中期～後期の墳墓」の上塙墓から出土した大量の石鎚のありかたから、矢を射こまれた弥生戦士の墓であり、その戦場が「田和山遺跡」ではなかったかと言う。

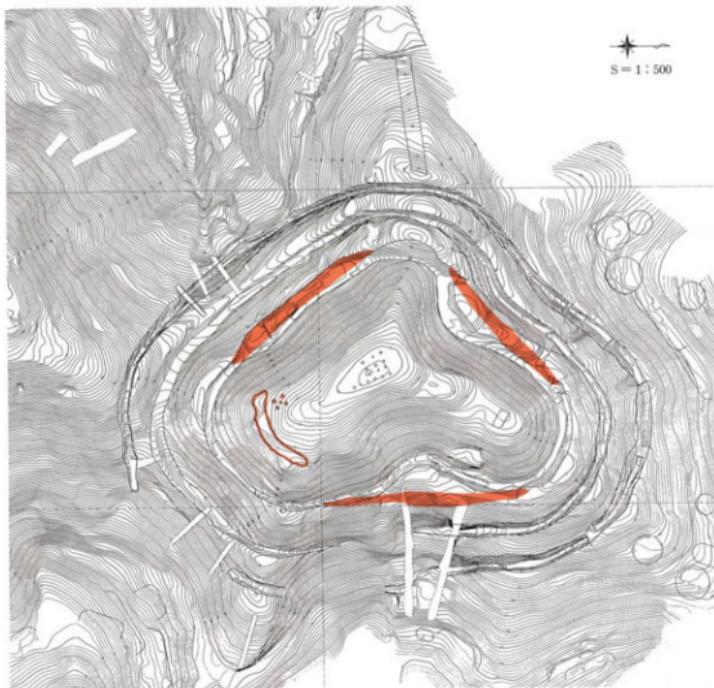
一方、別の研究者からは、「実際にいくさは無く、農耕祭祀にまつわる模擬戦（武器で邪悪を祓う）を行っていたかも知れない」という指摘もあります。その根拠は、①石鎚が実戦用としては小さ過ぎるものが多い。5cm以上の大型石鎚がない。②石鎚の出土分布が殆ど第1環壕に集中している。いくさがあつたならもう少し広範囲に飛んでいくだろ。③つぶて石も殆ど第1環壕から出土している。第1環壕は壇場として機能し、つぶて石は保管されていたのではないか。

### (3) 環壕の謎

このことは、なぜ環壕が狭い山頂部を取り囲むように厳重に巡らされたのかという問題にも深く関係する。

弥生時代は、農耕が開始され、川を中心にムラが出来、生活が徐々に安定していく時代だが、一方で収穫物としての米の管理や分配、水利権、農耕にまつわる祭祀権などをめぐって争いが絶え間なく起こった時代もある。そのため、ムラを外敵（隣村どうしや地域間）から守るために、ムラのまわりに環濠を掘った。それが「環濠集落」と呼ばれる遺跡である。

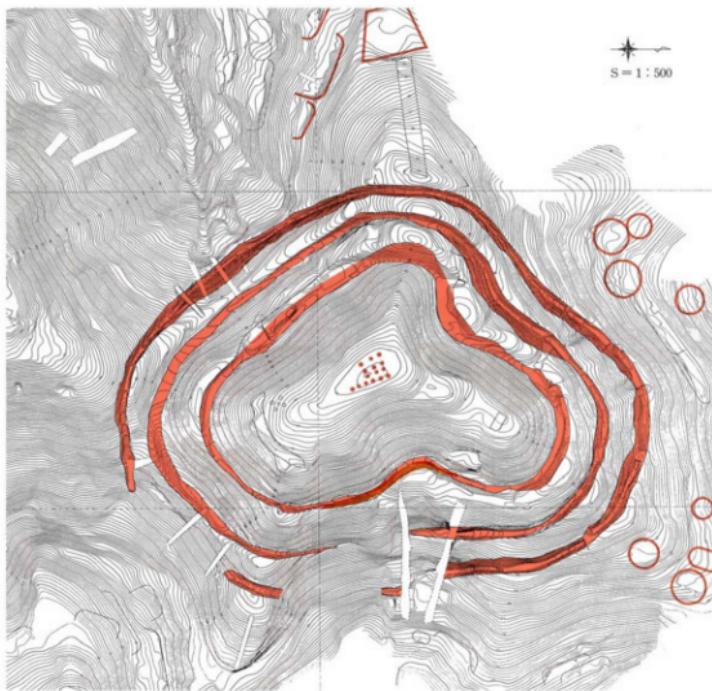
しかし、田和山遺跡の場合は、環濠の内側には小さな丘があるだけで、しかもその山頂部には竪穴式住居など一つもなく日常的に人が住んでいた形跡がない。集落跡は逆に環濠の外側斜面にあり、環濠集落としては極めて特異な方を示している。このような遺跡は、全国的に見ても極めてまれである。



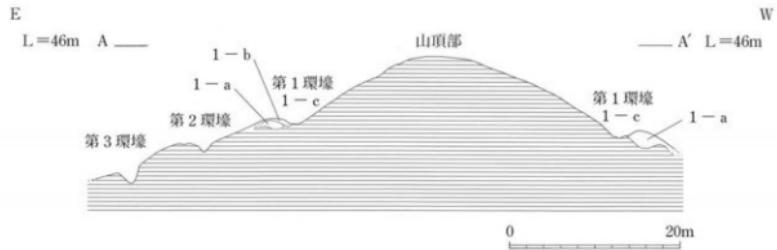
弥生時代前期末頃の田和山遺跡



山頂部、環壕、集落の構成



弥生時代中期後半頃の田和山遺跡



山頂部～環壕、東西断面図

#### (4) 山頂部の性格

このように考えてみると三重の環壕は、集落を守るためのものではなく、どうやら山頂部そのものを守るために考えたほうがより説明がつきやすい。それでは山頂部は一体どういう場所だったのか。小さな倉と物見やぐら、性格不明の無数の柱穴、塀、柵があり、多量の上器に加え銅劍形石剣や土玉も元は山頂部にあったと思われる。これらのことから、農耕にまつわるお祭りを執り行っていたのか、或いは当時の弥生人が最も大事にしていたものが倉に保管してあったのかいろいろ想像されます。

周辺の遺跡をみると、弥生時代前期後半から開始されたものが多く、忌部川を中心に広がる乃木平野を水田に開拓しながら、田和山遺跡の西と東にある丘陵や低地に居住空間が展開していくことがわかる。大規模な環壕の造成に際しては、このような周辺の複数の集落から人々が動員されて初めて可能となるものであり、山頂部で行われたかも知れない祭祀も複数のムラの共通する信仰に基づくものであろう。

#### (5) 廃絶の理由

弥生時代の出雲では、前期から中期まで続いた青銅器祭祀社会がやがて幕を閉じます。それは、斐川町の荒神谷遺跡や加茂町の加茂岩倉遺跡で青銅器が大量に埋納されたことからわかります。そして、後期になると四隅突出形埴丘墓が大型化し、埴墓祭祀に移行していくようになります。

田和山遺跡が機能していたのは中期後半までで、後期には廃絶しているという事実も山陰地方の弥生社会の政治的変容とよく符号するものであり、そうした変動期の動向をよく物語る遺跡である。

### 6. 遺跡の意義

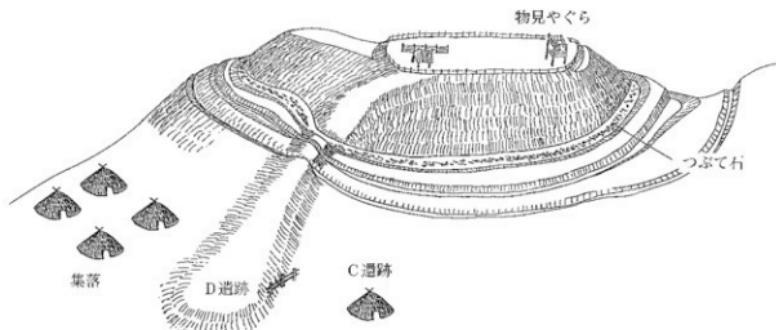
この遺跡の最大の特徴は、弥生時代に一般的な所謂「環壕集落」とは形態が異なり、環壕の内側には狭隘な丘と倉のような建物があるだけで、竪穴式住居は全くなく日常的に人の住んでいた形跡がないという点にあり、全国的に類例なく希少性が高い遺跡である。

銅劍形石剣など祭祀用具の存在から山頂部で農耕祭祀の執り行われた可能性やなぜ環壕の外側に居住空間があったのか、中期の末頃に突如として廃絶した理由などまだ未解明な点があるが、この遺跡の廃絶とほぼ同じ頃、出雲地方では加茂岩倉遺跡や荒神谷遺跡に見られるように、農耕祭祀に使われたと考えられる大量の青銅器が一括埋納され、後期になると大型化した四隅突出型埴丘墓による埴墓祭祀へと政治的状況が大きく変容していく。

田和山遺跡は、そのような弥生時代の出雲地方の変動期の社会的、政治的動向を物語る上で貴重な資料を提供する遺跡であり、極めて学術的価値の高い文化財である。

田和山遺跡群 遺構集計表

	時 期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	その他の遺構	合計	備 考
山頂部	弥生前期末			1	1	南部の加工段
	弥生中期後半		2	2	4	SB-02は潮る可能性あり
	古墳前期			1	1	7号墳
合 計			2	4	6	
環 墳	弥生前期末			1	1	1-a 環塙
	弥生中期後半			3	3	1-c 環塙、第2、第3環塙
	合 計			4	4	
環境外斜面	弥生中期後半	11	13	3	27	平坦面と焼土(D)、小ピット群2
	古墳中・後期	5	13	1	19	焼上遺構(C)
	古墳後期 -奈良・平安	1	9		10	
	平安後期以降		6		6	
	時期不明		1	2	3	貼石遺構、落とし穴状遺構
	合 計	17	42	6	65	



田和山遺跡想像図（弥生時代の中頃）



史跡指定範囲平面図

年 表

年 代	時 代	で き ご と	
300	縄文晩期	稲作文化が伝わる	
200	弥生前期	金属器が伝わる	
100	弥生中期	近畿では環濠集落が発達 出雲平野では環濠集落が出現	田和山第1-a環濠開削
紀元前 紀元後 1			田和山三重環濠を巡らし 山頂の施設も整う
100	弥生後期	神庭荒神谷・加茂岩倉で青銅器大量埋納 四隅突出墳丘墓 倭国大いに乱れる	田和山環濠廃絶
200	弥生終末期	(239) 女王卑弥呼 魏に使いを送る	
300	古墳前期		
400	古墳中期	前方後円墳が作られ始める	田和山7号墳が造られる
500	古墳後期		田和山A遺跡で玉作り
600			

現地見学会の様子  
(山頂部)



田和山全景



銅劍形石劍

編集・発行 島根県松江市教育委員会  
財団法人 松江市教育文化振興事業団  
印 刷 株式会社 谷 口 印 刷